

題名	コスモロジーの転換にどう向き合うか
Title	How to React to a Change in Cosmology
著者名	ブリュノ・ラトゥール
Author(s)	Bruno Latour
言語	日本語
行事名	第 36 回(2021)京都賞記念講演
出版者	公益財団法人 稲盛財団
発行日	2022 年 10 月 1 日
開始ページ	1 ページ
終了ページ	4 ページ
URL	https://www.kyotoprize.org/wp-content/uploads/2022/10/2021_latour_jp.pdf

英語版テキストURL：https://www.kyotoprize.org/wp-content/uploads/2022/10/2021_latour_en.pdf

コスモロジーの転換にどう向き合うか

ここブルゴーニュ地方で京都賞を受賞できたことは、私にとって実に感慨深いことです。この場所は、ラトゥール家が過酷な状況のなかなんとか運を掴んで、過去4世代に亘って居住してきた場所だからです。かつてブルゴーニュのワイン生産地ではフィロキセラ(ブドウの根に寄生するネアブラムシ科の昆虫)が至るところで異常発生し壊滅的な被害を被りました。それからしばらくして苗木の移植や継ぎ木がされブドウ園は再建されました。とくにこのコルトン近辺については、私の高祖父が再建を担いました。感慨深いとするもう一つの理由は、ワインが発酵、微生物、パチルス(桿菌)、酵素全般に関連しているからです。また今日コロナ禍を契機として、私たちがそうした微生物の活動に無関心ではいられなくなっているからです。

ここでの議論では新型コロナウイルスを話の糸口にしようと思います。それは、ウイルスがこの2年間私たちにまことに厳しい試練を与えてきましたが、同時にある種の実在について実に多くを学ばせてくれたからです。もしあなたがウイルスの専門家だとすれば何かを学んだとはいえないかもしれませんが、集合的に見た場合の、すなわち地球共同体としての私たちは、ウイルスから確かに何かを学んでいます。それは、この種類のエージェントのバイラリティということでしょう。(爆発的に)拡散するという意味でのバイラリティは、ウイルスや微生物に典型的に見られる性質です。いま振り返れば実に途方もない事態だったわけですが、新型コロナウイルスは中国のどこかで発生し、2020年の1月以降のおおむね3週間のあいだに口から口へと、口から手へと、また人から人へと伝染し、あらゆる場所に広がって、とうとう掛け値なしにグローバルといえるものになりました。異常な速さで生じるこのような連結はバイラリティに典型的な現象です。それを私たちは学びました。同時に私たちは、ウイルスが悲劇的なことに神業的なスピードで変異することを、またそれゆえ他の習性を実に素早く学習することを学びました。いまやウイルスの破壊力の増強ぶりを日々メディアで確認する事態になっています。さらに2年をかけて私が学んだもう一つのことは、コロナ禍が私たちの社会的関係をその根本から変えてしまうということです。私たちはマスクを掛けて生活しなければならないし、密を避けなければなりません。社会的関係の変更は家族間の関係といった狭い範囲を飛び出し、日本やフランスなど一国のなかでの関係や、さらには国家間の通交を再調整するといった驚きの事態にまで及んでいます。皆さんもご存知のとおり、いまや私たちは国から国へと簡単には移動できません。この国は渡航可だがこの国は不可だと確かめるのが私たちの日課になっています。

つまり、人間関係の繋がりすべてが、ウイルスがその中に入り込み我が物顔で連結を作り出すために、また人々をグローバルに繋げていくために変形を余儀なくされているのです。ともかくウイルスはグローバルに関して独自の見解を持つようだし、ウイルスなりのグローバル化の仕方があるようです。また突然変異についても独自の見解を持っているようです。さらにウイルスは、自身が潜入した場のなかで人間や(もちろん)細菌を含む他のすべての存在をいかに変形させるかについて独自の見解を持っています。それは実に興味深いし、私にとっては特にそうです。それは私自身が何十年か前に、偉大なフランスの細菌学者ルイ・パスツールを研究対象としたからだし、その研究が19世紀社会に潜入した微生物が当時の社会秩序(私たちがそう呼ぶもの)をどのように根底から覆したのかを解明するものだったからです。私たちはエイズ禍がもたらした悲劇のときにも学んできたし(いまも学習中ですが)、疫病に見舞われるたびに学習を繰り返しています。新型コロナウイルスに関して、現在グローバルな学習が進行中です。そうした状況が興味深いのです。

私はバイラリティをここでの案内役、一種のトークン、マスコットとして利用するつもりですが、それはすべてのコスモロジー(宇宙論)が、あえて言うなら、それ自身の特権の対象物を持っているからです。ここでは旧来の特権の対象物と今日の特権の対象物との比較を試みたいのです。今日の特権の対象物というと、ウイルスが持つバイラリティのタイプがそれだといえます。英語でいうならバイタリティ(活力)ということです。私たちが現在置かれているのがその典型的な状況です。さて、私が

ここで議論したいのはコスモロジーの転換ということです。コスモロジーは人類学者が用いる意味で使っています。つまり、周囲にエージェンシーを分配する仕組みのことをいいます。まずは大変奇妙な謎に触れておきましょう。なぜ新型コロナウイルスの出現に私たちはこれほど驚いているのかという謎であります。新型コロナウイルスが世界に拡散したその手口はウイルスとしては至極当然なもので、微生物が悠久の昔から実践してきたものです。ブルゴーニュでワイン製造を生業にしてきた私たちは材料を発酵させてきたのだから、もちろんそのやり方を熟知しているはずで、それにもかかわらず、私たちは新型コロナウイルスが出現して社会の織物の全体を作り変えなければならなくなったとき、まさに言葉を失いました。私はなぜそうなったのかを解明したいのです。つまり、私たちが過去からずっと居住し現在も居住しているこの世界を築いた存在として実に典型的な種類であるウイルスが、なぜそこまで私たちを当惑させるのかを知りたいのです。

今日の特権的对象物と旧来の特権的对象物とを対照させたいとして旧来のもの、その典型を探すとすると、少なくとも西洋の発想ではガリレオの斜面に眼を向けることになるでしょう。ガリレオは落下する物体の法則を計算するために、斜面にボールを転がしてみせました。人々は過去のコスモロジーを通して、世界が機能する様子をどのようにイメージしたのか——それを暗示する標準例、アイコンのようなものがあるとすれば、間違いなくそれはガリレオの斜面でしょう。斜面と大きなビリヤードボールさえあれば、そこで何度か転がしてみるだけで繋がりは見えてくる、ということなのです。ただこの特権的对象物には二つの奇妙な結果をもたらすという問題があります。一つは、理想的条件を除いてそれがうまく機能しないことです。科学史家なら誰もが知るように、ガリレオの実験は本人がいうほど正確でも厳密でもありませんでした。(理想を求めるなら)空気抵抗などを含めて結果のすべてをいったん忘れてしまわなければなりません。ガリレオが発見した法則もニュートン力学が生み出した法則全般も理想的条件でのみ機能したのです。したがって、この法則が完璧に計算可能だというためには、生命体としての私たちの生のあり方から距離を置く必要があったのです。もっともすべての科学は研究対象を理想化しなければならないから、これはたいした問題ではありませんでした。

二つ目の奇妙な結果はもう少し気になります。空間の外という想定 of 抽象的計算モデルでは、科学者もどこか別の場所に移送されると科学者自身がイメージしていることです。そうすると彼らは、自身が手にする理想世界という発明品と、彼ら自身がもう一つの世界で理想化されている状況とをどうしても混同してしまいます。この点こそが今日「どこからでもない視点」という言葉への批判として知られるようになったものです。そのために科学と科学者は、生き物としての自身の生活や存在がもたらす実際的結果から引き離されてしまいます。それはなんとも不幸なことです。落下する物体という特権的对象物について科学者が話をするとき、またそうした対象をどこからでもない視点から眺める科学について話をするとき、科学者自身はどこにも存在しないことになってしまうからです。さらにそれは、私たちが新型コロナウイルスの出現に驚愕するという現象の一因にもなっています。さて、どこからでもない視点の起源を考えてみるなら、それは少なくとも西洋の伝統では、神学がもたらしたものの、万能の神について説くキリスト教神学がもたらしたものであるでしょう。そうした神自身が特定の存在場所を持たないからです。つまり科学的想像力が生み出す「どこにも存在しないという性質」——世界についての科学的見方と私たちが呼ぶもの——は、西洋の伝統ではキリスト教神学に由来しているのです。

最初のコスモロジーの特権的对象物を参照すれば、グローバル化するウイルスの出現がなぜ私たちをこれほどまでに驚かせているかが部分的であれ理解できます。つまりこういうことです。もしあなたが落下する物体を、世界をかたちづくる標準的な構成材料と捉えているなら——それを私は初期コスモロジーのいわゆる標準的マスコットと見なしますが——生命体(生命形態)は実に奇妙な存在と化してしまいます。生命体は行く先も見つけられず、どこからでもない視点のなかでいわば整理箱のようなものにならざるをえないからです。ところが実態はまったく異なっています。生命体のエージェンシー文法は、すなわち生命体の振る舞い方は落下する物体のそれとは似ても似つかぬものです。そしてあなたも知るように、17世紀の初頭から20世紀中葉にかけて展開した機械工学、物理学の伝統に、つまりそこでの整理箱に生物学が入ろうとしたものの、結果的に何度も厳しい困難に遭遇してきました。なぜそうなるのでしょうか。生命体が——新型コロナウイルスはその好例ですが——実に素早く反応し、つねに他者の行動による攪乱を受け、突然変異を繰り返し、たびたび変異を生じさせる、そ

うした存在だからです。さらに生命体は驚くほど早く適応し、ときに生命体同士で合流し、互いに折り重なり連結を生み出していきます。実際、ウイルスは私たちの敵なのか味方なのか、それすら私たちにはわかっていません。だからウイルスをどこにも位置付けられません。あるときウイルスは私たちにとって必須の存在となります。ウイルスや細菌なしに私たちは生き延びることすらできません。しかしまたあるときは、私たちがウイルスと猛然と闘います。あるいはウイルスのハイスピードの変異に合わせた対応策をなんとか編み出そうとします。ウイルスとの間には実に奇妙な関係が生じているのです。ただここで奇妙というのは、以前のコスモロジーで使われた別の標準モデルに照らしてみた場合の印象です。私たちの住むこの世界に照らせば奇妙どころかごくありふれた関係ということになります。だからこそ、それは尽きせぬ驚きの源泉にもなったし、コロナ禍が驚きだという事態の原因にもなるのです。エージェンシー文法は、あなたがウイルスを新しいコスモロジーの典型的対象と認めたときから、まったく異なる様相を見せるのです。さて、革新をもたらした人物としてダーウィンは確かに記憶されるべき存在ですが、ダーウィンでさえ自然の摂理に従うものと捉えていました。すなわち自然法則である自然選択に従うということです。落下する物体の法則が正統な伝統において果たした役割を、そこでは自然選択が果たすのです。つまり、ダーウィンは状況を大きく変えることはありませんでした。そこには依然として自然の摂理が働いていたのです。もっとも私たちが今日、目撃しているのは、自然の摂理などまるで存在しないかのような状況です。すなわち、ウイルスの上にはウイルスが、細菌の上にはウイルスが、そして生命体の上にはウイルスが常時、折り重なるように入り込んできて、私たちのこの世界を作り上げている光景を私たちは目撃しているのです。

さて結論を引くならこういうことでしょう。私たちはいま一つの特権的对象物から——それを落下する物体という標準例で示しましたが——別の特権的对象物へと——あえて表現するなら、バイラリティを最適例とする奇妙な考え方でしょ——移行しています。それが事実だとすれば、私たちは確かにどこかに着地しなければなりません。生命体の世界の内部に私たち自身を位置付けなければなりません。新型コロナウイルスと、それが代表するエージェンシー文法は間違いなくこの生命体の世界での典型的存在でしょう。ウイルスは確かに以前からそこに存在したし、ウイルス学や細菌学を含め、そうした存在に関する科学もすべてそこにありました。ただウイルスは、最初のコスモロジーの特権的对象物とは離れた周辺部に置かれていたのです。それがいま、もう一つのコスモロジーへと私たちは移行し、そこでの特権的对象物はウイルスになったということです。ここでとくに興味深いのは、コスモロジーの転換が——それをここでの第二のテーマとしたいのですが——いくつかの重大な結果をもたらすことです。それは、私が近刊書で新気候体制と呼んだ状況に対して多大な影響を及ぼしています。新気候体制とは、私たちがいままさにその中にいることを発見した状況のことをいいます。さて重大な結果の第一は、もしあなたが新しいコスモロジーの特権的对象物としてウイルスとそのバイラリティを採用するなら、科学はもはや「どこからでもない視点」を持ったものではなく、生命体の生活のなかに挿入された何かへと大きく変貌するということです。コロナ禍のただ中で実施されたロックダウン時に、私たちは科学が実に壮大なスケールで実践されるのをこの眼で見ました。私たちは疫学について大いに学び、新型コロナウイルスの振舞いについて理解することがいかに難しいかを身をもって知りました。この間に動員された科学のすべてが誰から見ても歴然としていて、意図的に可視化されたものだとすらいえます。科学ジャーナルだけでなく一般メディアに対しても論争の種をふんだんに提供しています。またウイルスの科学を実践するにあたり、力学に対して実践してきたことを適用しようとしてもおよそ適用できません。力学に携わるのに科学者はどこからでもない視点を手に入れ、その場を離れる状況を思い描いてきましたが、それが一切できないのです。それどころか、科学者は新たに「ここ」からの視点を手に入れ、新型コロナウイルスをめぐる論争に、すなわちウイルスは実際にどのように追跡されたのかだとか、ワクチン接種という一大事業を通してウイルスの活動がいかに迅速に制御されるようになったのかといった論争に深く巻き込まれていきました。ちなみに、ワクチン接種の実施に当たって各国が経験した困難や複雑な事情を考えれば、制御できたウイルスの活動はほんのわずかだと認めざるをえませんが。

コスモロジーの転換がもたらす重大な結果の二つ目は、すべての生き物の、絶え間なく続く活動とその素早い反応性について——少なくとも西洋の伝統、西洋社会においてそれは困惑でしかなかったのですが——私たちがようやく学び始めたことです。とくに驚きなのは、学びがウイルスという極小スケールと、大気という極大スケールとで同時に起きていることです。結局、いま地政学のすべてが

気候のコントロールという問題に、過去の生命形態だけでなく現存人類の生活形態を含めたすべての活動の結果として生じる複雑な気候の問題に向けられています。二つの極端なレベル、ウイルスと大気のレベルにおいて、生命体は私たちの行為に対し驚異の速さで反応を返し、それがまた私たちの反応を引き起こしています。それを私たちは学んでいます。なにしろ私たちにウイルスによる感染症が起き、過去百年の私たちの活動が原因で大気がいわば病気の状態に陥っているのです。こう言ってよければ、デフォルトの位置設定が変わったのです。以前からこれらはよく知られていましたが、周辺的な取るに足らないものと見なされていました。それがいまや必要不可欠なものになり、すべての動き、すべてのエージェンシーを一つ一つ照らしてみるときのデフォルト値と化しています。

重大な結果の三つ目は——これをもって議論は結論へと向かいますが——以前のコスモロジーの標準的対象、愛すべきマスコットは歴史の進展、原動力、ベクトルに関して今とは別のプロジェクトを駆動してきましたが、それが変わることです。以前、歴史と見なされていたのは、あらゆる力を駆使して地球を脱出し、世界の科学的見方がイメージする世界へと移住を果たそうとする動きです。それこそが、最初のコスモロジー——落下する物体の特権的対象物とするガリレオの法則を取り込んでいる——が想像した世界です。もちろん要点を明確にするために単純化しドラマ化しています。しかしもしあなたが旧来の特権的対象物に代えて、バイラリティ、ウイルス、そしてそれらが拡散し私たちの行為に反応する手法を取り入れるなら、そしてそれを極小レベルと極大レベルで、またその中間のレベルでも行うなら、あなたはもうすでに以前とは別のプロジェクトのなかにいるといえます。まったく異なる歴史に突入しています。そしてそれは、私がいくつかの著作のなかで、また長い学究生活を通して近代プロジェクトの終焉と呼んだ状況からの完全な転換を意味しています。西洋の伝統のなかの近代主義は、全面的に一つのベクトルによって駆動されてきました——ベクトルとは、私たちがある奇妙な方法を使えば、すなわち無限個のアクセス点と無限量の資源を持つ世界は存在するという奇妙な発想を駆使すれば世界の外側に脱出できる、そう考えることです。ところがいま私たちは地球に回帰しています。もともと地球を離れる方法など存在しなかったのです。私たちはここ、この場所に帰らなければなりません。それこそ私が数年にわたって議論してきたことです。もっともこうも言わなければならないでしょう。コロナ禍は私たちすべてに並外れた教訓を与えました。それはコロナ禍が気候の危機そのものに結び付いていたからです。二つの危機——一つは医学的危機、そしてもう一つはコスモロジーの危機——は相互に相手を自身のなかに埋め込んでいるのです。

だからこそいま私たちは、新たなプロジェクトに取り組まなければなりません。新たなプロジェクトは近代のプロジェクトとはまったく違うものです。科学、芸術、法、そして道徳科学のすべてが異なっています。そしてそれが、京都賞を受賞できたことを何より光栄だと私が思う理由です。皆さまには衷心から感謝を申し上げます。この新たなプロジェクトが今後、私の残りのキャリアを通して推進していきたいことだからです。つまり、普遍的世界ではなく、ここ、この地球で生きなければならないとすれば、どんなものが近代プロジェクトの代替になるのかをじっくりと探究するのです。もちろん火星への脱出を目論んでいる人々がいることを私も承知しています。ただそれはもう過去のプロジェクトになったのではないのでしょうか。私たちの未来はこの地球に回帰することだからです。そしてそれは私にとってのここ、私の家、微生物が深く関与して作り出した世界です——同時にそれはワインの世界でもあります。そういえることがなんとも愉快です。短い講演の最後に祝杯を挙げられればと思いますが、なんとか京都賞を祝う方法を探してみるつもりです。さあもう一度、皆様に御礼を申し上げて講演を終えることにしましょう。

(訳：川村久美子)